

異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての 「我々」と「彼等」のコミュニケーション問題（24）

—正義のための飛躍—

青 木 順 子

Taking a Leap to Realize Justice in Intercultural Communication Education

Junko AOKI

安田女子大学文学部英語英米文学科

要 旨

本稿は、アイリス・マリオン・ヤングの『正義の責任』において提示されている構造的不正義に対する責任逃避の四つの戦略（物象化、繋がりへの否定、直接性の要求、私の仕事ではない）、責任逃避のための自己責任の言説、「帰責モデル」の限界、そして、「社会的繋がりモデル」について考察している。ヤングの提唱する「社会的繋がりモデル」においては、構造上のプロセスを通じてお互いに繋がりがあっている人々が責任を分有し、責任は広がっていき、限定されない。構造的不正義を生み出すプロセスに加担していることから生じる未来志向の責任は、この責任を分有する人々がそのプロセスを変革するために集団的行動を組織化することによってのみ果たされる。

キーワード：異文化コミュニケーション教育、異文化教育、正義

はじめに

「異文化コミュニケーション教育」では、「構造的暴力について正しい知識と理解を得る」努力とともに、「一人ひとりが・拘り・今・自分に・出来ることを、丁寧に問い・声をあげ、かつ、耳を傾け・異なる他者とのコミュニケーションを続け・それを通して得た真理を・実現しようとする」ことを目的におく。そして、「異文化コミュニケー

ション教育」において最終的に「真理を・実現しようとする」とする時に、拠り所になるのは正義である。こうした正義に基づいて「真理を・実現しようとする」ことについて、2021年の論稿¹⁾では、その正義を考えるのに拠り所となる正義論を、ロールズ、シュクラー、そしてヌスバウム、それぞれの正義論から、「異文化コミュニケーション教育」に取り入れることができる点を考察した。異文化コミュニケーション教育では、こうした正義論の知見に基づいて授業を構成することは必須となるだろう。

しかし、正義論からの応用可能な考え方を授業に入れ込むことで確実に可能性が高まるといえるのは、学習者側が「構造的暴力について正しい知識と理解を持てる」ことにおいてである。当然、こうした正しい知識と理解は、構造的暴力を被る人々への理解を深め、その人々に対してすべきことに気付く機会を増やし、さらにはそのために自分も行動したいという気持ちを持つようになるという可能性をも増やすだろう。しかし、それだけでは、必ず「正義のための飛躍」ができるのではないことも確かなのである。「正義のための飛躍」について、次節で詳細に論じるが、「異文化コミュニケーション教育」では、共に生きる世界において、あるべき「正義」を真摯に考えることで、その正義に基づいて行動できる「普通の人びと」が大多数となるような社会の実現に貢献し、その「普通の人びと」の覚悟が少しでも可能になるような「飛躍の仕方」を探求する、という両方

の課題が同時に求められるということ、これまでも一連の論稿において論じてきた。このことを前提にして本稿でも考察を進めていくものとする。そこで、以前発表した論稿から、この目的のために必要であると思われる箇所の転載をすることで本稿を始めたい。

1. 正義のための飛躍

太宰治の短編小説『走れメロス』²⁾には、「誰もが認める」正義感が強いとされる主人公メロスが出てくる。この「走れメロス」とネットで打って検索をかけると、このメロスの正義の示し方に疑問をはさむ声がいくつもあることに気がつく。メロスを正義の人とすることには誰も疑問がなくても、メロスの正義の示し方については否定的に言う人達が少なからずいるのだ。メロスの正義感が強いという事実には万人一致していても、メロスの正義の示し方には、「単純すぎる」、「自分勝手」、「自己中心」という批判を向けることができる。言い換えれば、メロスの保持する正義自体は否定できないけれど、その正義の示し方は批判され得るといっているのである。けれども、ここにこそ、正義の性質が示されているのではないだろうか。「正義」は人々が敬い尊重すべき生き方の指標となる概念だということは分かっている。正義は文字通り正しいのであり、だから、メロスの正義自体は批判できない。同時に、その正義の示し方は批判される可能性がある。場合によっては、正義の人、メロスの正義の示し方は、称賛されるどころか、「自分勝手」、「自己中心」と、まるでエゴイズムの具現のような人物による自己中心の行動を批判するのと全く同じ言葉で批判もできるのである。そして、そうした類の批判であれば、さほど問題もないように感じられるのである。

エゴイズムの対極にあるはずなのに、エゴイズムと同じような批判を受け取る可能性さえある正義とは一体何なのだろうと考えていた頃、『ヘーゲルの法哲学』で、動機と結果という観点を導入した時の正義とエゴイズムには四つの場合があると、加藤が以下のようにまとめているのを見つけた³⁾。第一は、動機がエゴイズムで結果もエゴイズムである場合で、これは単純な犯罪である。第二は、動機はエゴイズムでも、結果は正義で、

「正直は最善の策」と考えるので嘘をつかない人の例があてはまる。第三は、動機は正義なのに、結果はエゴイズムになる、もしくは悪になる場合で、世界を救うために殺人をする、という場合があてはまる。第四は、動機が正義で、結果も正義となる場合で、ヘーゲルのいう「個人の内面での自己規定という仕方では達成できない課題」ということになる。従って、「個人の努力目標としては、ギリギリいっぱい動機が正義で、結果も正義であって欲しいという所までである」となる⁴⁾。ヘーゲルは、さらに「エゴイズムから正義が生まれる。正義の内容はエゴイズムを克服している」という⁵⁾、その内容を、加藤は、以下のように説明している。

<自分だけ>の幸福を集めた総和が<みんな>の幸福であるならば、つまり社会唯名論が正しいならば、正義とは最大多数の最大幸福である。しかし、正義とエゴイズムとの間には、飛躍がある。飛躍があるからメロスがいる。すなわち正義を動機とする行為者は利害を忘れていて、そして正義はすべての人にメロスのようにひたむきであることを求めている。⁶⁾

結局、「正義とエゴイズムとの間には、飛躍」があり、そして、「正義を動機とする行為者は利害を忘れていて」わけで、そのメロスはエゴイズムからの飛躍の出来た人間であり、そうできない人間がそのくせ必要としている、その正義から求められていることをまさに実現した人物なのである。「正義はすべての人にメロスのようにひたむきであることを求めている」。だから、飛躍しない者達は、たとえメロスの正義の示し方は批判できたとしても、メロスの正義や正義感自体は否定できないのだ。飛躍が出来ないままで、それでも正義を信じて生きたいはずの普通の人間として、正義の求める、メロスのひたむきさを茶化すことだけにはためらいがあるべきなのだ。飛躍が出来ない人間として、そうすることへの恥ずかしさがあるべきなのだ。

メロスの正義を考える時思うことがもう一つある。メロス自身は彼が命をかけて糺そうとした不正義の影響を被ってはいなかったことである。彼は2年ぶりにシラクスの市にやってきて、初めて市がすっかり様変わりをしていることを気づく。

「笛を吹き、羊と遊んで暮らしてきた」メロスは、「野を超え山を超え、十里離れた」シラクスでの王の暴虐に関わらず、買い物を終えて帰郷すれば、これからもシラクスから遠く離れた村で牧人として平和に生きることができると思われる。シラクスの市の住人は「ひっそりして」「寂しい」生を強制され、王の周辺の人びとは命を失う恐怖に日々慄いているが、メロスはその中の「誰か」になる可能性はない。また、そのシラクスの住人である「刑場の群衆」は、物語の最後、メロス達の言葉に「歎歎の声」を、王の改心を聞いて「歓声」をあげるが、もしも王の改心がなかったなら、その同じ群衆の中にも、磔台のメロスを重々しく批判して見せる者は必ずいるだろう。まさにそうした状況でメロスは飛躍したのである。彼の持つ「正義」がその飛躍を可能にしたのである。メロスの正義を示す方法は批判し得ても、彼の正義を茶化すこと自体は恥ずかしいと感じる理由はここにある。

2. 構造的不正義への責任回避

『走れメロス』の場合は、行為者が特定できない構造的暴力ではなく、直接的に暴力を行使すると名指しできる者、すなわち、王、が存在する点では直接的暴力であるが、絶対王政の制度自体が許している暴力ということでは広義の構造的暴力となると考えられる。構造的暴力について知識と理解を得た時でさえ、正義のための飛躍は難しい。それを妨げるものについて考察している際、大きな指針を与えてくれる本に遭遇した。2014年に日本語版が刊行されているアイリス・マリオン・ヤングの『正義の責任』である⁷⁾。ヤングは、構造的不正義⁸⁾への責任を避ける時、その構造的不正義の存在を認めている時でさえも、個人や機関が責任からの距離を取ろうとする典型的な戦略として四つを提示している⁹⁾。以下、彼女が挙げている例をあわせて、その四つの戦略の要点を示すことにする。

一つ目は、「物象化」¹⁰⁾で、現在している行為をする以外には選択の余地がないとして、起きていることを不変の客観的事実として扱うことを指す。この物象化は、特定の社会関係での人間の行為の産物をモノや自然の力のように扱う行為者の

態度に存在する。実際は変更ができるのに自然現象や客観的事実のように扱うのである。例えば、区画整理の条例が低所得者の借家人の追い出しにつながる事が予期されても、開発業者の市への呼び込みにはそれをするしかない、とするのがこの例となる。ヤングは、この物象化が構造的不正義に対する責任を避ける方法として作用するのは、社会的プロセスと効果が人間の行為に始まるのではなく、まるで不変であるように行為する時であるとし、その時、物象化が、今なされている行為をそのまま受け入れる口実となって使われているという。

二つ目は、「つながりの否定」¹¹⁾で、他者が被っている何らかの問題のある状況に対して、自分には繋がりがなく、それゆえ特別な責任がない、と主張することである。これによって、遠くにいる他者との繋がりを否定できることになる。制度やプロセスの中で遠くにいる他者との繋がりを否定する行為は典型的である。例えば、上述の「物象化」の例にある低所得の借家人のおかれている状況と自分が直接の繋がりがあるように見えない時は、彼らに私達は責任を感じないことになる。

三つ目は、「直接性の要求」¹²⁾で、直接的な繋がりを基礎にして責任を負うとする傾向である。私達の生活には目の前の人、家族、友人、同僚、仕事の同僚、顧客、コミュニティで交流する人々のように多数の人々がいて、私達は自分との繋がりを基礎にして、直接の関係性を基準に責任の要求に答えるのである。他者との関係の近さが、責任を、自由に先立つものとして要求することになる。

四つ目は、「私の仕事ではない」¹³⁾であり、たとえ不正義について誰かが何かをするべきであると認めていても、自分自身の役割としては要求されていないとする。つまり、構造的不正義の存在自体は認めていても、自分が果たす役割はその不正義と取り組むことを要求されていないとして、時には意図しないまま不正義に加担し、また時には不正な帰結に無関心のままでいることになる。

このようにヤングが提示した構造的不正義の責任回避の四つの戦略が私達の日常において、ある程度の不可避さを保持していることは否定できない。しかし、こうした戦略を使用しない時に正義は行使されるのである。第1節にあげた『走れメ

ロス』のメロスが、もしこの四つの戦略を使ったら、どのようになるのかを仮定してみよう。まず「物象化」—王政で絶対的権威を持つのは王であり、王の命令は認めるしかないとする、また、王を絶対権力者とする構造を当然の事実として受け入れる。そうであれば、メロスは何もする責任はない。「繋がり」の否定—シラクスの人々は王の暴虐な行為のために恐怖の中で暮らしているが、その状態自体は、十里も離れたシラクスの様子さえ一度も聞くことがなかった村で牧人として生きているメロスには何の繋がりもないのだ。特別な買い物を終えて村に帰れば、彼の生活はシラクスでの不正義の状態に影響されることは全くない。「直接の要求」—不正義に苦しんでいるシラクスの人々との直接的な関係は彼には存在しない。メロスには、彼らは家族でもなく、親類でもなく、友達でもなく、同僚でもなく、隣人でもないわけで、そもそも彼らをメロスは直接には知らないのだ¹⁴⁾。「私の仕事ではない」—シラクスの人々の恐怖下の状態は理解し、王を糾すことも必要とは考えるが、その役割を果たすのは、遠い地の牧人の自分ではない。他にその役目に適切な者があるはずであり、それは私ではないと考える。こうやって四つの戦略のうち一つでも使えば、メロスは王のところに向かわなかったことになる。あらためて考えてみる時、ある程度不可避でもあるといわれる、こうした四つの戦略のどれをも使わなかったからこそ、メロスは疑いのない正義の人なのであろう。それでは、これらの四つの戦略を「普通の人々」が使用することを躊躇い、構造的不正義をただす自分の責任を避けないような者となる、正義のために行動をするような者となるには、どのような思考がそこに必要とされるのだろうか。その問いに答える前に、次節では、ヤングが挙げている責任を避けるために使われる強力な言説を見てみたい。

3. 責任を避けるために使う自己責任

ヤングは「自己責任」の言説が、いかに責任免除に巧みに使われるかについても説明している。「自己責任」とは「あなたとあなたの家族に対する責任である」という意味であり、「各人、あるいは各家族は、その行為の結果を自分のものとし

て引き受けるべきだ」という理念である¹⁵⁾。この「自己責任」の考えは、法言説に典型的にみられる責任モデルであり、「他の人びとの責任を免除するために、特定の行為者に責任を負わせるのを目的とする」¹⁶⁾。こう説明して、ヤングは「自己責任」の人氣は、この言説のもつ責任免除にあるという。

くわたしたち>は、他者に対していっさい責任がない。ただ、あらゆるひとは自分の行為の結果、誤って他のひとに迷惑をかけないように監視され、(たとえば、ちゃんと補償を支払うことによって)自分自身で、行為の結果を「引き受ける」責任があるのだ。この見解からすると、社会プロセスとともに参加していることによって互いに関係しあうことに、いっさいの積極的な責任がないということになる。もし、他者に頼ることなく、各人が自足的に生きているのならば、それで彼女たち/彼らは、自己責任を果たしたことになる。¹⁷⁾

この「自己責任」が1960年代から70年代の米国の貧困に関する社会政策についての批判に使われたが、三つの前提がそこに存在するとヤングはいう。一つ目の前提は、「自己責任と社会構造的な因果関係は二元論的で、相互に排他的なカテゴリーである」¹⁸⁾。ヤングはそれに対して、構造的説明が示すのは、どのような機会が同じように位置付けられた人に開かれているかであり、そうした機会に対して、各個人がどのように行為するかではない。それを考慮しないで、みな平等の機会に恵まれていると仮定することは不誠実となるという。二つ目の前提は、「人々が行為する際の社会的諸条件は不正なものではない」ということである¹⁹⁾。これにもヤングは、そもそも社会的に不正でない構造が存在するのかどうかと疑問を呈する。人々が社会から何の不正も被っていないということを前提としているわけだが、実際にはそうではなく、そもそも例えば、真の機会の平等が存在しているとは認めがたいのである。三つ目の前提は、「政策立案者と市民が心配しなければならないのは、逸脱した貧しい人たちの責任だけである」というものだ²⁰⁾。この三つ目の前提である、貧しい人々の責任だけが心配すべきこととする点について、ヤングは、「自己責任」のレトリックが、貧困に関して以下のようなトートロジーを生んでいるという—これらの人々の貧困の理由は、

彼らが自己責任をとらないからであり、そして、自己責任をとらない証拠に彼らは公的扶助に頼っているから、となっている。この論法は、公的扶助の受給者を、彼らが公的扶助を受給している者だからという理由で「異なる者」とし、特別の注目を与え、それは「彼らだけが自己責任を欠いている」こととする²¹⁾。この言説が、貧しい者をさらに孤立させ、彼らへの非難をゆるすことになるわけで、まさにおかしなことなのである。

福祉をめぐる公的な言説に影響を与える自己責任のレトリックの力にもかかわらず、地道に生きているときに、責任ある市民であることが、単に、そして全く他の人に依存しないことを意味すると考えているひとは、ほとんどいない。すべての行為がもたらすコストを引き受ける孤立した家族というイメージが非現実的であるだけでなく、そのイメージは、人びとが日常的に互いをケアしあわない、醜い世界をあらわしている。²²⁾

さらに、責任ある人が責任ある行為によって他の人に与える影響を悪くしないように基準に従っているということも事実ではない。いわゆる経済的に恵まれた人が無責任な行為をすることはあり、大きな組織の権力者が、自己中心的に無責任に判断したことで多くの人が迷惑を被ることもある²³⁾。ヤングは、こうした三つの前提の欠陥を指摘した上でこう言い切る。

貧しくないつまり、いま現在貧しくはない—わたしたちは、特権と不利な立場、拘束と可能性からなる、この同じ構造に、ある時点で貧困ライン以下に陥っている人びとと同じように参加している。わたしたちは、この構造に関連するわたしたちの責任を測る必要があるのだ。²⁴⁾

再び『走れメロス』で、この「自己責任」を考えてみたい。本質的に不平等な社会的構造において皆が平等の機会を与えられているわけではないことを考慮せず、悪化するシラクスの状況において、そのシラクスの人々が解決するためにできることがあったのに彼らは何もしなかった、そもそも彼らが賑やかなシラクスの市に住むことを選んだのだ、と「自己責任」の言説を使ってメロスが解釈するのであれば、不正義を糾す自分の責任という考えはメロスには起こらず、メロスが行動を

起こすこともなかったことになる。人間不信を急速に膨らませていく王に気付けなかった親族、また、王の暴虐の行為を知りながらそれでも贅沢に暮らして目立ってしまった者、つまり当事者の「自己責任」である、とむしろ彼らの責任の欠如を呆れて責めることもできるのである。「自己責任」の言い訳を使わないようにすることを、少なくともその使用を少しでも減らせるような、また前節に挙げた四つの戦略を使わないような、その基となるモデルを示すことができるのだろうか。これについてもヤングは答えを用意しているのである。

4. 「帰責モデル」の限界と「社会的繋がりモデル」

ヤングは、法と道徳的判断における責任付与の実践の基盤となる「帰責モデル」自体は、責任を罪、非難といった帰責責任として構想し、法システムと道徳的権利においても不可欠であることは認める。しかし、構造的不正義に対しては、「帰責モデル」には限界があるとする²⁵⁾。ヤングは、ホームレスの例を使って説明をしている。ホームレスのAの不幸な環境において、特定の、例えば、大家、開発業者、政府の役人と、問題を解決すべき誰かを見つけようとするが、それは一つの大事な点を見落とすことになる。ホームレスという結果を引き起こすプロセスには多くの人が関与していて、個々の人間は自分の行為がその結果にどのように関与しているかについては自覚がない。そして、構造上のプロセスの本質は、「潜在的危害を遡って誰か特定の関与者だけへと至ることができない」点にある²⁶⁾。

ヤングは、さらになぜ「帰責モデル」を發展させて上記のような問題を解決できないのかについて、カツの共犯の理論を使って、以下のように説明している²⁷⁾。カツの共犯の理論では、例えば、ドレスデン爆撃の任務に参加したものはすべて、途中、例えば爆撃前にパラシュートで地上に降下したパイロットも含めて、同じように加害に関与したと考える。なぜなら、集団的行為に関与するのは「一人ひとりが集団的行為の目的を自分たち自身の目的だとみなす」からであり、「参加する意図」においてはドレスデンまで飛んでいった爆撃したパイロットも途中脱落したパイロット

もみな同じであったからである²⁸⁾。カッツは、これを「構造化されていない集団的危害」とよぶ²⁹⁾。カッツは、地球規模の気候変動の例でもこの共犯の理論を使っている³⁰⁾。地球規模の気候変動のプロジェクトなどというものに誰も加わっているものはないにもかかわらず、この不正義を生み出すプロセスには多くの人々がそれぞれの場で加わっている。共通の関与意図はなくても、行為が結果においては「疑似的な参加関係」にあるというのがカッツの言うところである。ヤングは、この場合はカッツの説明に賛同できないとする。構造的な不正義と呼ぶものは、まさにカッツが呼ぶ「構造化されていない集団的危害」にはあたるが、引き起こされる危害に自分の行為によって参加したことは非難に値するにしても、そうしようとした意図が存在しないことが実際は多くの場合に見られるからである。結果を生み出すことへの意図がない人が、意図をもって行動した人と同じように罪があるとは見なせないのである³¹⁾。そこから、ヤングは、構造的な不正義への責任について考えるのに、既存の婦責モデルではない、違う発想に基づくモデルを必要とするのだと説明していく。

不十分な婦責モデルでは補えない、代替になるモデルとしてヤングが提示しているのが、「社会的繋がりモデル」である³²⁾。この「社会的繋がりモデル」を見ていくことにしよう。このモデルの基幹には、「個人が構造上の不正義に責任があるのは、自分達の行為により不正な結果をもたらすプロセスに関与するから」という考えがある³³⁾。つまり、不正義に対する責任は、個々が「構造的な不正義を生み出す多様な制度上のプロセスに参加していることから生じる」のである³⁴⁾。この「社会的繋がりモデル」が、「婦責モデル」と比較してどのような特徴があるのかについて、ヤングは以下のように5項目にわたって説明している。

一つ目は、「選定をしないこと」である³⁵⁾。「婦責モデル」では、有責の人々とそうでない人々を区別する。つまり、責任ある人々を見つけ、選定し、その含意として、責任はないとされる人々からは区別するのである。「社会的繋がりモデル」では、実際に構造的な不正義がある時、ある人々を特定の不正行為に対して罪があるとみなすことが、同じ結果に関与した他の人々が他の形で負うべき責任を放棄することにはならないとする。構

造的な不正義に参加している者は、たとえ刑法的、法的、あるいは道徳的非難や過失認定の既存の体系においては不正とみなされることは何もしなくても、存在し続けるかもしれないのである。

二つ目は、「社会背景としての諸条件を判断すること」³⁶⁾。「婦責モデル」では、加害者を見出す必要がある不正や、賠償責任の生じる危害とされるものを、許容範囲の基準値から何らかの形で逸脱していると考ええる。一方、「社会的繋がりモデル」では、道徳的に理想的ではないとしても、許容可能な範囲だと考える通常の一連の社会背景としての諸条件を想定し、通常であることや許容範囲から逸脱する危害をただ評価する以上のことを行う。

三つ目は、「過去遡及的ではなく、より未来志向に」³⁷⁾。「婦責モデル」では、非難、罪、過失の認定という実践の第一目的が、過去遡及的である。一方、「社会的繋がりモデル」は、未来志向的であり、社会的プロセスの変化がなければ今後も永続するであろう構造的社会的な不正義に対する責任を帰すことを求めている。そのため、大事なものは過去に対する賠償ではなく、不正な結果を生み出すプロセスに関与するすべての人びとが、これらのプロセスを変化させるために協働することとなる。しかし、このモデルも、一点においては過去遡及的である。構造がどのように不正義を生産し再生産するかを理解するためには、それらが過去においてどのように生じし、現在まで機能してきたかについて理解する必要がある。

四つ目として、「分有されるべき責任」³⁸⁾。自分達の行為によって不正義を生む構造上のプロセスに関与する人々はみな、その危害についての責任を分有しているとする。分有するべき責任は、私が個人的に負うが、一人で負うのではない。また、構造的な不正義に関して分有される責任は、単なる態度ではなく、むしろ自らの行為を通じて生み出す、通常の継続的プロセスに対する責任である。

五つ目は、「集団的行動を通じてのみ責任を果たすこと」³⁹⁾である。集団的行動に他の人々とともに参加することによってのみ責任が本質的に分有されるとする。

前述したように「婦責モデル」と「社会的繋がりモデル」の違いを説明したヤングは、たとえ

ば、ホームレスという構造的不正義に対して、「社会的繋がりモデル」がどのように機能するかを以下のように説明している⁴⁰⁾。ホームレスという構造的不正義に対する私の責任を果たすには、私はこの福祉への脅威がただの不運ではなく不正義の問題であり、私達は一緒にそれを引き起こすプロセスに参加しているのだということを、他の人々に説得する必要がある。そうすれば、私たちは自分達の集団的關係を構築し直し、必要な実践を変革していくよう、お互いに呼びかけるようになる。責任は、不正義の被害者であると考えられる人々の多くにもあり、その不正義についての責任を分有している。責任の「帰責モデル」では、不正義の被害者だと主張する人びとを非難することは、たいていの場合、被害者の苦境に対する他の人々の責任を免除するように作用する。一方、「社会的繋がりモデル」では、構造的不正義の被害者だと感じている人々もまた、そうした諸構造を変革するための行動に他の人々とともに参画する責任を分有するよう呼びかけられる。このように「社会的繋がりモデル」では、構造上のプロセスを通じてお互いに繋がりあっている人々が責任を分有し、責任は広がっていき、限定されていない。構造的不正義を生み出すプロセスに加担していることから生じる未来志向の責任は、この責任を分有する人々がそのプロセスを変革するために集団的行動を組織化することによってのみ、ようやく果たされる⁴¹⁾。

メロスの正義の行使にもどってみたい。一節で述べたように、彼の示した正義そのものは彼のような飛躍をしない者には批判はできない。それでも、正義の行使の仕方においては「単純」、「自己中」、「自分勝手」と何がしかの批判を許してしまうのは、この「社会的繋がりモデル」から考えると明確になろう。不正な結果を生み出すプロセスに関与する全ての人々が、これらのプロセスを変化させるために協働する過程—責任の分有への働きかけ、がメロスの正義の行使には全く存在しないのである。不正義の解決の責任を自らが躊躇いもせず取ったことでは、その正義への大きな飛躍ゆえに尊敬に値する一方、正義の遂行に対して何ら堅実なモデルをもっていなかった点では、メロスは確かに「単純」なのである。メロスは捉えられ、妹の結婚式のために3日間の猶予を願うしか

なく、そのために親友セリヌンティウスが身代わりで呼ばれる。「自分勝手」、「自己中」という批判が出てくるのは、こうして自らが提案して突如セリヌンティウスを巻き込んでしまうことにあるといえよう。物語に依る限り、2年振りに再会するセリヌンティウスは、メロスとの強い友情と信頼関係によって躊躇いなく身代わりを引き受けるが、メロスの「反抗」という行為自体に共感を示したというわけではない。「反抗」への連帯者ではない彼の生命を危険にさらしたという点では、メロスは自分勝手だ、自己中だ、と感じてしまう者もいるのである。

社会的プロセスの構造的不正義に責任を分有して協働する過程のモデルのあり方をきちんと理解することで、メロスではない、普通の人の「正義の跳躍」への可能性を増やすのではないかと筆者は考えている。ヤングの「社会的繋がりモデル」の説明に戻ってみたい。彼女は、私達の日常における衣類の生産と消費の過程について以下のように説明をしている⁴²⁾。一枚のシャツの買い手が、綿花の栽培、織物、裁縫、衣類の輸送にいたるまでの過程に関わる人々の行為があることは知っていても、直接的という意味では、私達は自分との関係をほとんどの過程で見ることがない。しかし、全ての生を条件づけている構造上のプロセスに参加することによって、何百万人という見ず知らずの人々と繋がっていることを認識することはできる。教育の場面では、提示する一つひとつの不正義がいかに結びついていくかについての丁寧な提示がまず必要であろう。それに対して、成功した不正義の是正のモデルを提示して見せる必要がある。他者と責任を分有する形で社会的プロセスに変革を未来志向で行使していくことが可能であるようなモデル—それを正しく理解させることは、少なくともその行為に進んでいく可能性を高めるであろう。

5. 『走れメロス』の結末

メロスの正義や正義感自体を、そして、ひたむきな正義のための飛躍を茶化すことには私達は躊躇いがあるべきと感じることには変わりはない。しかし、『走れメロス』の物語の結末を、もし変えることができるならと一度問うてみたい⁴³⁾。

『走れメロス』のハイライトともいえる感動的な結末では、お互いにおきた迷いの瞬間を告白し合い抱擁する二人を見て、王はまた信実を信じることができると言って自分も仲間に入れてくれと言う。

「おまえらの望みは叶ったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わたしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい」とどと群衆の間に、歓声が起こった。「万歳、王様万歳」⁴⁴⁾

物語の始まりに戻ってみよう。メロスが王の暴虐を聞いて王城に向かい、捉えられて王と対面した時の二人の会話部分である。

「市を暴君の手から救うのだ」「おまえがか?」「仕方の無いやつじゃ。おまえには、わしの孤独がわからぬ」
 「言うな!」「人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ。王は民の忠誠をさえ疑って居られる」
 「疑うのが、正当の心構えなのだ、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心はあてにならない。人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ」「わしだって、平和を望んでいるのだが」
 「なんの為の平和だ。自分の地位を守る為か」「罪の無い人を殺して、何が平和だ」⁴⁵⁾

原作の物語が疑いのない前提として提示している、構造的不正義の制度そのもの、暴力と抑圧の可能性のある制度そのものの存在に疑問がおきたら、一体どうなるのだろうか。そもそも、王の暴力を人々がそのまま甘受するべきとメロスが思わなかったからこそ、「物象化」をしないで王城に乗り込んでいったのである。その時点で、王制の絶対的な権力と抑圧は、少なくともメロスにはすでに当然のことではなくなっている。本人が意識していないとしても、である。メロスにとっては、人々の安寧のための政治をしない王はすでに絶対的な不可侵の存在ではない。そして、メロスが単身王宮に乗り込んだ時の彼の意図は王を殺すことにあり、彼自身がもしそれに（きわめて稀な偶然によって）成功したとしても、自分の命を失うことは覚悟していたと考えられる。実際、メロスもこう言っている—「私はちゃんと死ぬ覚悟でいる

のに。命乞いなど決してしない」。つまり、メロスは、すでに反抗者として、王殺しという「反抗」を実施しているのである。メロスの正義のための飛躍は死を賭した反抗である。それゆえに、メロスの正義自体には何の茶化しはできないと私達は感じるのだ。メロスは、カミュが『反抗の人間』の中で記しているような反抗者なのである。

反抗者が殺人を行うようになれば、殺人行為と自分とは一致させる方法はただ一つしかない。つまり、自分の死と犠牲を承知させることである。殺人が不可能であることを明らかにするために、彼は、殺して死ぬのである。⁴⁶⁾

王が改心したとしても、所詮王制である限り一夜にして変心できる。永遠の安寧の保証ではないと群衆が気づいてしまったら—これはまさにメロスの正義のための飛躍への批判どころではない、劇的な結末の書き換えとなろう。王政の権力構造と暴力への気づきだけで群衆は止まるのだろうか。メロスとセリヌンティウスのような信実の人の死を自分の一存で決められるような不正義な社会に生きることは自分達も嫌だと、王を王城に追い詰めていっても不思議ではないのだ。「革命」の始まり⁴⁷⁾。さらには、そうした反抗に打って出た群衆を見て、メロス自身は何を思うだろうか。彼も思い出すかもしれない。そうだ、自分も言ったことがある、「なんの為の平和だ」、「何が平和だ」。

5. おわりに

「一人ひとりが・拘り・今・自分に・出来ることを、丁寧に問い・声をあげ、かつ、耳を傾け・異なる他者とのコミュニケーションを続け・それを通して得た真理を・実現しようとする」ことを目的におく異文化コミュニケーション教育において、正義の実現へのモデルの可能性をきちんと教えることをしなければならない。その上で、正義のための飛躍を期待する、これが教育のできることであろう。「メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。」—『走れメロス』の冒頭である。構造的不正義は、それを真に理解をする時、私達の激怒を引き起こすべきものである。そして、メロスのような

正義のための飛躍が必要とされる世界で、その飛躍は必ずしも単身で王城に乗り込んだメロスの的である必要はないことを教えること、同時に、「王様、王様万歳」という群衆の歓声でメロスの物語は終わる必要がないことを教えること、の両方が要求されているのである。正義のための飛躍についての考察は次の機会に続けたいと考えている。

注

1. 青木順子「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（23）—『異文化コミュニケーション教育』における正義の扱い」（安田女子大学紀要 49、73-84、2021年）
2. 本稿での原文の引用は、全て、以下の本からである。太宰治『走れメロス』新潮社 平成29年。
3. 加藤尚武『ヘーゲルの法哲学』青土社 1993年 p.149.
4. 加藤、p.168.
5. 加藤、p.148.
6. 加藤、p.168.
7. アイリス・マリオン・ヤング、岡野八代、池田直子(訳)『正義の責任』岩波書店、2014年。(Young, Iris Marion Responsibility for Justice, Oxford University Press, 2011.)
8. 本稿では、『正義の責任』にあわせて、過去の一連の論稿で使用してきた「構造的暴力」の代わりに「構造的不正義」(“structural injustice”)を使うものとする。
9. ヤング、pp.234-260.
10. ヤング、pp.234-239.
11. ヤング、pp.239-244.
12. ヤング、pp.244-251.
13. ヤング、pp.251-259.
14. 身代わりとなる親友、石工セリヌンティウスはシラクスの住人ではあるが、物語に依る限り、王宮に向かう前に、セリヌンティウスが王の残虐の行為の被害者であるとはメロスは考えてはいない。
15. ヤング、p.11.
16. ヤング、p.12.
17. ヤング、p.12.
18. ヤング、pp.18-25.
19. ヤング、pp.25-29.
20. ヤング、pp.29-35.
21. ヤング、pp.30-31.
22. ヤング、p.32.
23. ヤング、p.33.
24. ヤング、p.35.
25. ヤング、p.147.
26. ヤング、p.149.
27. ヤング、pp.150-152.
28. ヤング、p.151.

29. ヤング、p.152.
30. ヤング、pp.152-154.
31. ヤング、p.154.
32. ヤング、p.155.
33. ヤング、p.156.
34. ヤング、p.156.
35. ヤング、pp.157-159.
36. ヤング、pp.159-161.
37. ヤング、pp.161-163.
38. ヤング、pp.163-165.
39. ヤング、pp.165-168.
40. ヤング、p.166.
41. ヤング、p.275.
42. ヤング、pp.242-244.
43. 多面的に物事を見ることを目的にした結末に対する間であって、物語自体が本来持っている文学的な意義や価値とは全く別の次元の間である。
44. 太宰、pp. 181-182.
45. 太宰、pp. 166-167.
46. カミュ、アルベール、佐藤 朔、高嶋正明『反抗的人間』（カミュ全集6）新潮社、1973年、p.257.
47. (46) で引用したカミュは、「革命」は「反抗」ではないとする。「革命は、歴史的経験への観念への移行であり、これに対して反抗は、個人の経験を出発点として観念に向う動きである。」それゆえに、「革命」には「対立しあう反抗の動きをひき起こす段階」が存在し、それが「革命の限界」で、「失敗の可能性」も与える（「反抗に関する考察」アルベール・カミュ、『カリギュラ・誤解・ドイツ人の友への手紙』（カミュ全集3）新潮社、1972年、pp.190-191.）

[2021. 9. 16 受理]

コントリビューター：青木 克仁 教授
(公共経営学科)

